

大阪市立大学大学院創造都市研究科 公共情報システム論

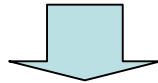
第四回 情報公共圏について

2004・6・5

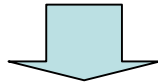
近 勝彦

公共圏とは

- 近代社会の行為領域は主に2つある。その一つは、「目的合理性」を行為原理とする国家・経済システムと、もう一つは、「コミュニケーション合理性」(了解的合理性)を原理とするもので、私的領域と公共圏がある。(ハーバーマス)



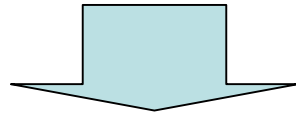
- 「コミュニケーションの流れは様々なスクリーニングにかけられ、次第に統合されて課題ごとに世論をつくりだす」



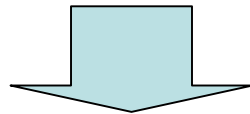
- 「この世論 = 公論は、公権力に批判的に対抗していくもの」
- であった。

公共圏の歴史的経緯

- 市民的公共圏の原初形態は、サロン(コーヒーハウス)(17世紀後半から18世紀)に生まれた。



- 文学に対する自由な批評(文芸的公共圏)



- 新聞などのマスメディアの誕生とジャーナリズムがその専売特許と化していった
- (メディアの独占化)

公共圏成立の条件とは

- 社会的地位の平等性
- 対等な関係性の意識と行為
- 公衆における討論
- 所与自体を疑い、常識を批判にさらす
- 参加の自由公開性
- 誰でもが参加することの意義

情報通信システムの公共圏成立性

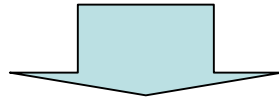
- 平等性
 - インターネットはまさに発話者の属性を考
 - えないメディアである
 - →知識や情報や認識に共有性があるのかは疑問
- 公衆の討論性
 - インターネットはウェブログにみるようにまさに様々な人々
 - の自由な意見の場として機能している
 - →アジェンダセッティングが難しい、散漫な自己表現
- 公開性
 - インターネットは公開が本来的な機能
 - →無責任な場荒らしも起きる

コモンズの悲劇と情報公共圏

- <コモンズの悲劇>
- コモンズの悲劇とは、国家による管理や、私的管理のほうが、公的な共有よりも資源の収奪がおきにくいということ
- コモンズはその管理と責任が非常に重要となるが、本来的にその運用は難しい
- 情報コモンズでも同様の結果となるのか？
- - > インターネット空間のあり方
- <コモンズのジレンマ>
- 情報の管理化は外部効果を阻害しないか


課題1 - システムの内容

- システムの利用者への配慮と工夫
- 使いやすいか、使用者の興味を満たしているか
- 能力を配慮しているか
- 管理のあり方
- 上手に管理運用されているか



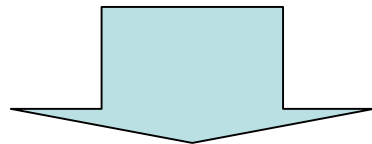
- システムの有効性は実証されているのか

課題2 - 社会資本の確立

- 情報公共圏のなかで市民が情報システムを使いこなすような整備がなされているか
 - 環境の設定ができているか
- 
- 市民の公共圏基盤が実現しているか

課題3 - 社会組織の形成と運動

- 市民のNPOや各種の団体ができているのか
- e-デモクラシーなどに対してそれを利用しようと考えているのか



- 市民運動の健全な支援が行われているか

総括

- 情報公共圏としてのe-デモクラシーは、
- 市民の財産の効率的運用(行政効率性)
- 市民の効用の増大
- 民主的な機能を果たしているのか



- 形式的な設計と実質的な効果のある情報空間とは異なる。いまはその過渡期だろうか。
- 実質的な「情報 × 公共圏」はe-デモクラシーを導くか。